多磨墓地をはじめとする公園墓地の成立・展開と今日的課題

横 村 久 子*

The Coming into Existence, Progress and New Prospects of Today in Tama-Cemetery

Hisako MAKIMURA

摘要：現在、墓地として供給されているのは「公園墓地」と呼ばれる様式である。これが日本でどのように成立、展開したか、その意図したものと、現在に至っての限界と矛盾点を明らかにする。明治初年に神葬墓地として東京市や大阪市に新墓地が都心遠隔地に形成されるが都市人口集中で都市計画上から必要に迫られ、井下清により計画された多磨墓地をもって始まる。その後同様式の墓地が全国に造成された。しかし、形式として欧米自然風景式、習俗として日本の埋葬、家族制度を理念としたために、限界にある。問題はハード面での公園様式と近代化の中で変化していった習俗、家族の構造変化に対応せず重ね合わせた中にミスマッチを起していることがわかる。

はじめに

現在、墓地として供給されているもののほとんどは、「公園墓地」と呼ばれるものである。部落員または組合員だけが利用できる部落有墓地—準公有墓地以外は、地方公共団体、または公益法人や宗教法人の供給する利用対象者を一般としている。これらの墓地はこの「公園墓地」の様式によって、墓地公園、墓園、霊園などとも呼ばれている。すでに1830年代にアメリカで考案された“農村の共同墓地”は、公衆衛生上の観点から発想され、公園の景観の形成に公的関心をむけ、¹⁾ オルムステッドのセントラルパークの成立にも影響を与えたといわれる。

この公園墓地が日本でどのように成立、展開したか、その意図したものと、現在に至っての公園墓地のもつ問題点、課題を明らかにしたい。

1. 公園墓地の成立

(1) 多磨霊園以前 — 明治以来の公営共葬墓地

日本の最初の墓園、いわゆる「公園墓地」は、東京都の多磨霊園をもってはじまる。

それ以前は、「部落有墓地にしろ、寺院墓地にしろ、明治以来の公営共葬墓地にしろ、いずれも名称は墓地であったが、その外観は葬地に墓石を羅列したともいえる殺風景なものが都市には多い。農耕地の一隅、松の古木の下に静かに立つ数個の墓碑といった美しい農村風景の点景に比すれば、今日の都会の雑踏にとり囲まれた墓地は、極めて雑ばくにして、都市景観を悪くしているばかりでなく、合理的土地利用計画を甚だ阻害しているとい

うことができる。」²⁾ と、都市景観上と土地利用計画の上で従来の墓地様式では支障があると指摘している。

明治以降の人口の流動化と都市集中で増加する一方の人口に、まず東京市が墓地の需要が追いつかなくなる。東京市の共葬墓地が全部使いつくされ、一坪の余裕もなくなったのは大正の8年のころであった。さしせまってくる墓地不足にどう対策をたてるか迫られていた時に、事前に墓地研究をはじめ、案を練っていたのが、多磨霊園を計画した東京市・技師の井下清である。

「明治以来の西洋文化の移入は、都市の公共施設にも及び、墓地もまた例外ではない。たとえ宗教は異なりといえ、祖先を敬まい、死者を丁寧に葬り、その霊を慰めることに変わりなく、欧米における優れた公園式墓地は、わが国の担当者を刺激した。」³⁾

井下清の『建墓の研究』の中で、庭園墓地の創設の章で、この研究をはじめたきっかけをこう述べている。「我国に於て比種の研究はドクトル本郷高德氏が尤も早かったと思はれるが、現実の事業経営としては大正の初年に林学博士白澤保美先生から、欧米視察の土産として、著者（井下）に東京市墓地事業の参考にと、Hann Pietzner, Landschaftliche Friedhofe といふ、1903年の研究発表が贈られたことが動機となって、在来墓地の葬地不足と相俟って、本郷ドクトルの援助を得て、急速に東京市墓の将来計画に没頭することとなった。」⁴⁾

そして、井下は、「古来家族制度を基本とする我国風と習俗は新時代の墓制を樹立するうえに於て大いに尊重すると共に、世界の新しい施設をも研究することを痛感

*奈良文化女子短期大学

して」⁸⁾ 白澤氏のドイツの文献をきっかけに、フランス、イタリア、アメリカ、その他の都市からも資料を収集し、構想を練った。

研究設計は、「墓制、葬法に関する国風国俗は、当然新墓地制の基本となるべきもの」⁹⁾として、欧米の庭園墓地制と調和すべき形態と制度について研究が続けられ、大正7年にほぼ完成した。

ところが、この構想、研究設計は広大な敷地が必要であったこと、庭園墓地、風景墓地として、風致環境に注文があったこと、当時として莫大な資源を要したこと、さらにこれまでの墓地の陰惨な暗いイメージから用地の確保に地元の意向で障害が大きかったことなどで、井下の試案も遅ればせになっていた。

「丁度その頃、当時、東京市政調査会創設の核心であった、東京市助役池田宏に同試案が認められ、都市計画事業として巨費を得て実現されることになる。(中略) 夢物語ではないが、理想計画案としていたものが急速に実現することになって、用地を物色する一方、実施案を編成推進したことが多磨墓地創設の発端であった」と、井下は当時のいきさつを、日本で初めて形として風景墓地を実現できる喜びを書き残している。⁷⁾

(2) 多磨墓地の成立 — なぜ公園墓地が出現したか

日本で初めての試みであった風景墓地は、こうして、大正8年、東京市西郊多磨村に位置を定め、実施設計を完成して、同年12月に当時の主務省へ提案。大正9年8月に、東京市都市計画事業として決定し、同年12月に内閣の認可を受けて初めて多磨墓地が設定された。そこで、東京市は直ちに実施に着手し、大正10年2月に、面積30万坪の用地費と第一期設備費として3万3,000坪の施設費を合わせて、133万8,000円余の議決を得て、大正12年4月に一部を竣成、使用を開始した。⁸⁾

この多磨墓地が大変歓迎されたことにより、続いて東京市では、昭和8年に八柱霊園(千葉県松戸市)、横浜市では日野墓地、昭和15年に大阪市の瓜破霊園、同16年に大阪市の服部霊園、千葉市に千葉墓地と、首都圏と大阪都市圏域に公園墓地が相次いで造成、公園墓地＝風景的な大共同庭園墓地が、人口集中度の高い大きな都市から、その後全国に広がっていくことになる。

こうして多磨霊園は、日本で初めての公園墓地となり、しかも、井下らの多大な墓園研究の成果、また理想の計画であると考案されたため、その後も長く現在に至るまで墓園設計に参考とされている。理想とされる点は、麗しく明るいつ衛生的な新しい時代の墓地とされたことで、次項16～18行にあげられる点、さらに廉価であったことである。建設省が昭和38年5月に局長名で「墓地計画標準」を作成するにあたって、多磨霊園は多大の実地資料を提供した。と同時にこれにより、墓地の建設様式が

画一化、固定化されるようになった。

(3) 多磨墓地が意図したもの — 庭園墓地の観念

さて、井下によって日本初めての庭園墓地として意図されたものは、「新旧の習俗と内外基本概念の錯綜の上に立って」、それは、日本の内にある「古来家族制度を基本とする我国風」の観念と、日本の外の、欧米にある「自然の麗しく朗かな浄地」の観念の2つである。つまり、中味は日本風の家制度による家族の意識構造のまま、外の形は西洋風の庭園様式の都市公共施設の合体である。精神は日本の習俗、技術は欧米の庭園墓地を取り入れたものである。

「我々の都市生活に、自然の麗しさと、靈妙な其力を享入れて庭園を作り、公園街路樹となって居る如く、永遠の安棲地である墳墓の地も亦自然の麗しく朗かな浄地でありたいのである。」⁹⁾と、井下は、都市生活に公園、庭園のもつ美しさ、整備された自然の清浄さ、麗しさ、その明るさを墓地の空間として、デザインに重ね合わせようとした。そこで、「都市の近郊に高燥にして風光明媚なる広大な浄地をとし、大庭園としての構想をもって高雅にして優麗なる園地を営み、其内に各種各層の墓所及び其に係した施設の地を定め」¹⁰⁾たいとした。

《公園墓地とは》

多磨墓地のこの様式は、それ以後現在に至るまで、墓地計画の様式として定着してきた。しかし、多磨墓地は名称は「多磨霊園」であり、当時続いて造成されたものも、「八柱霊園」、「服部霊園」など「霊園」であるが、様式の名をとって公園墓地と呼ばれている。近年造成された墓地には、「緑と花の墓地公園」など、「○○公園」と名付けられた墓地が多い。

「公共、葬務施設の内に近年各方面から関心をもたれ施設されている、風景霊園がある。俗称としては公園墓地であって、葬地であることによって根本的性格は異なっているが、公園の朗らかな楽しいふんい気に関連して親しまれていることは喜ばしいことである」「俗称公園墓地」は、井下が欧米の墓地研究の中から、「わが国と習俗のいちじるしく異なるイタリー式の建築美術的な風景墓地でなく、自然の肅然たる風光を主とするドイツ・オーストリア式の風景葬地観念に、わが古来の習俗を調和せしめてまとめた。」¹¹⁾イタリー式は総合納棺館を中心建築とし、苑地の墓碑も美術彫刻で飾られた建築美術的な墓地に対し、ドイツ、オーストリア式は造園的に区画された緑地内に、簡素な墓碑が整然と配置されたものである。

庭園墓地の特質として、・庭園的な構想の内に区割、通路、広場と、それに添うて樹林、芝生、花壇を配置すること・その内に大小各種の葬地、その他の施設を配置し、麗しい施設そのものが庭園的な構成要素となること。そのため・葬地利用面積の従来墓地が敷地の6割を使用

する為に比べてそれを3割とし、7割を装景のために犠牲を払っていること。それによって・美しい樹林や地形の起伏はすべて風景的に利用していること、としている。¹²⁾

そのために庭園墓地は“風景”墓地，“森林”墓地，“自然”墓地とも呼ばれている、と述べている。

この風景的、森林的、自然的なものが、公園墓地の要素となっているが、これだけではない。「同時に墓地としての営造物とその取扱いもそれに即応することになって、個々の墓所の設計から墓碑の形態その他施設物や管理方法などが、統制指導されて庭園墓地、墓地施設に一大光明を見るのである」¹³⁾とし、「自然を風景的に利用し、さらに植込み、花壇、並木道や水景が主要な要素となっていることは当然のこととし、さらに、墓石や関連施設も、庭園内の修景に一要素として、統制されなければならない。また、美しく管理される方法があって、はじめて庭園墓地の本質に迫るもの」¹⁴⁾と考えられていた。

多磨墓地が「わが国古来の習俗」による墓石の形態や埋葬様式を除けば、「時代文化の表現」「近代的傾向」として、武蔵野の赤松を主景とする風景と、通路や庭園施設の修景に、広大な庭園と市民に受け止められたにちがいないのである。

多磨墓地以後造成されたこのような様式の墓地には、墓地公園、芝生墓地などの名称もつけられている。建設省では、墓地造成に対する国庫補助事業においては「墓園」という名称を使用している。いずれも、「公園のように美しい墓地」、公園式墓地を表現している。

建設省の「墓地計画標準」では墓所を全面積の3分の1以下としているが、これは、多磨墓地が、井下が修景上、「通路と庭園施設に面積の3分の2を割いた」¹⁵⁾ことによると考えられた。そこで、都市計画法における墓地は、名称は「墓地」であるが、内容は「墓園」として指導され、計画、事業の決定が行われているのである。

(4) 多磨墓地の受容

それ以後、墓地の一般様式になった公園墓地も、多磨墓地が利用開始した時には、すぐに市民に受け入れられたわけではなかった。

「この新型墓地に対し、毀損褒貶相半ばすると言うよりは、当局の非常識に呆れたという風な観方が相当あった。したがって之が本質的特色を説きその利用を勧誘するにあらゆる機会を利用し手段を採ったが、初は有識者の外は他に墓地が得られぬ為、止むを得ず使用する如き傾向があった」¹⁶⁾と述べているように、これまでの墓地の観念からあまりにもかけ離れていたこと、また規模が広すぎ、遠隔地で、造成したばかりの苑地はまだ荒涼としたものであったためである。

ところが、利用を促進することになった3つの理由がでてきた。第1に、大正12年の4月にこの多磨墓地が開

設されたが、同年9月に、関東大震災が発生したことである。東京市内下町の寺院墓地が全滅状態になって、その後の区画整理事業で市内の墓地を一掃（明治22年当時、330,507.690坪、筆数1,182が、昭和10年には120,480.670坪、筆数183へと減少）したため、移転先として、新墓地の多磨がやむを得ず使用されたこと。

第2に、植物、風景の成熟と面積の広大さにより、一大公園の観があったこと。「創始時代の幾年かを経過する内に、造園的装景は、年と共に完熟し、その崇高なる自然の風致、四季花絶えざる壮観は空前の雄大なる規模と共に漸く一般大衆の感嘆に値することとなり、初めて市民の誇りとする社会施設として東京名所の一として認識せられ、また賛称されるに至った」¹⁷⁾

第3に、有名人の使用で、人気が上がったことである。「社会的名士は勿論、東京市の各層を通じて数万の利用者を包容するに至り、更に東郷元帥の国葬を迎えるに至っては、精緻なる郊外の霊域は日々幾千万の参拝者を大型バスにて輸送さるに至って、神聖な霊域も紅塵万丈をあぐる如きこととなり、市内街路の如き管理を必要とするに至った程」¹⁸⁾になった。

これらの理由から、当初は利用を勧めるPRに苦心していたのが、「全国的に多磨公園墓地の声価を高め、従って各地方に於いて之が建設を企図するに至ったことは、認識の反映と言わなければならぬ」

2. 都市計画と墓地

(1) 都市の膨張発展と戦災復興

大正12年の多磨墓地の一部完成以来、昭和17年ぐらいまで、近代的な都市部の公営共葬墓地として公園墓地が大都市に相次いで造成された。しかし、第2次世界大戦に突入するとともに、墓地行政もしばらく停滞したまま終戦を迎えることになる。

ところが、日本の大都市が空襲や火災などで大きな戦災を受けたことで、新しい墓地時代を迎えた。

戦後、110余の戦災都市の復興事業にあたり、昭和22年2月「復興土地区画整理に伴う墓地整理方針」が都道府県知事に通牒された。この内容は、昭和20年12月30日に閣議決定された戦災復興基本方針によるものである。都市の墓地は、市街地を離れた郊外に適正に配置された公園式墓地とすべきで、市街地内の墓地は、極力そこに移転すべきである、というものであった。

この方針に基づいて「担当者と寺院側との困難な折衝の結果、郊外の適地を復興事業区域と飛び換え地として、墓地を移転することになった」。昭和22年から30年初めにかけて、墓地の移転が行われた。移転された墓地は、移転先では都市計画によって、都市計画墓地の決定が下されている。その跡地の土地利用として、公共緑地、宅地、公園、道路、児童公園、公共用地に用いられている。

代表例をあげると、能代市・公共緑地及び宅地、千葉市・公園等公共用地、四日市市・公園、神戸市・道路及び宅地、堺市・宅地、鳥取市・児童公園、宇部市・公園及び宅地、高松市・公共用地、宅地、熊本市・公園又は宅地化、である。名古屋市は、この時に市内にある墓地を徹底的に一掃し、郊外に全面移転。同市郊外の平和墓苑に移転した例は、有名である。

この方針により、第1にそれまで居住者が自分の居住地域にもっていた墓地が、居住地と切り離され、生活の場である地縁を失うことになる。そして墓地が遠隔化した。第2に、墓地計画様式が、公園式墓地（つまり公園墓地）の形態が決定的になった。

(2) 墓地の移転と新墓地の造成

しかし、歴史をさらに以前に遡ってみれば、墓地の移転は、戦災や火災が直接的な移転動機となっているが、膨張、発展する大都市においては、市街地内の墓地を郊外に移転しても、やがて移転先も市街地に囲まれる。そして、さらに遠方に移転することをくり返してきた。

たとえば、大阪市とその周辺をみると、明治以降の墓の移転がハッキリわかる。明治3年4月、千日前の刑場を廃止するにあたり、火葬場と墓地の移転地として、南の新墓—天王寺埋葬所が造成された。新墓は、現在の阿倍野墓地である。大阪には、明治以前この千日前の千日墓地の他に、「大阪七墓」¹⁹⁾と呼ばれる墓地があった。梅田墓地、浜墓地、吉原墓地、蒲生墓地、小橋墓地、飛田墓地である（図1）。これらの墓地は、大阪市街地を取り囲むように配置されていたが、明治初期に「大阪七墓」は、再び整理統合されて、南（阿倍野）、北（長柄）、岩崎の三カ所に移転されている。

明治6年太政官布告の火葬禁止令、明治7年墓地取締規則の布達により、東京市では神葬祭地として公営墓地として青山、谷中、雑司が谷、染井など6カ所の墓地が設置された。いずれも明治7年に供用開始されている。し

かし、当時「郊外遠隔の地に設置せられた筈の青山外6カ所の墓地が、現在においては、都市の中央に介在するが如き状況」²⁰⁾になっていた。またそれ以前の明治26年頃から、市内に散在する小墓地を東京市外に移転する方針が決まり、順次実行されていった。

明治の初め、「郊外遠隔の地」と考えられ設置された6カ所の東京市墓地は、都市域の拡大で市の中心部となると同時に、人口膨張によって大正7、8年ごろに供給はほとんど不可能になり、東京市外、郊外の遠隔地の多磨村に東京多磨墓地の造成に連なるわけである。

明治以前は、徳川幕府の政策により、「寺院が邪宗禁断の一機関」として、人々は一宗一菩提寺の檀徒でなければならなかった。そして、住所の移転には、寺請證文を必要とし、寺檀関係が密接で、そのため、市街地内にある寺院墓地を利用するのは当然であり、むしろ歓迎された。ところが、明治政府により、神葬観念に基づく公営墓地が設置され、離檀思想の進展とともに、東京市の都市の発展のための都市計画の重視から、遠隔地へ移転させられることになる。

この時、墓地の配置について参考にしたのが、ドイツの墓地新設についての制度である。それは、住家に対しては風向きにより、日射多く植物の成長が良好な所とされている。又、道路は病弱者のために、乗用車馬の交通路のあることを必要条件とし、埋葬については河川に沿わないこと、土壌は、乾燥質で、強度のろ過力のあることをあげている。つまり、公衆衛生上の観点からである。①檀徒思想 ②衛生上 ③都市景観上 ④都市内の土地利用上の面から、ドイツ墓地新設の条件を参考として、結局は都市中央部から遠隔地に墓地が新設されていくこととなった。

しかし、それまでは寺院境内墓地に埋葬していたのであり、市民の住居と近接地であった墓地が、この明治期の都市計画の重視とヨーロッパドイツの墓地の配置理念に基づいた墓地政策によって変質。その第1に住人の居住地、仕事場の日常生活地と、家族の墓地が切り離されていった。

また、第2に墓地は都市の公共施設として捉えられはしたが、都市内でなく都市外へその都市施設を放出することになった。

しかし、墓地の移転は、都市改造され、都市整備の一部が実行されたとしても、それだけでは不十分である。都市計画の見地からは、拡張していく都市人口に伴って、その市民のための新たな需要に、都市の公共施設として造成していく必要があるからである。将来の都市の発展を見直して、当初から適地に公営の公園墓地を計画していくことが絶対必要であり、その意味において都市計画の施設として墓園が定められているのである。

昭和39年の大阪府土木部発行の「墓園」には、「最近

図-1 大阪七墓と明治・昭和初期の新墓地

における都市人口の激増に伴い、都市公共施設としての墓園の造成は、都市行政にとって、重要な課題となっていた。大都市から小都市に至るまで、用地取得の困難性はあっても、全国的に墓園を設けようとするところが増加した。²¹⁾

昭和39年は高度経済成長の前夜であり、都市への人口集中が伸び、昭和40年代の地方公共団体による、墓地供給が始まるのである。しかし、墓地の様式が公園墓地とされたことにより、墓地供給の矛盾と限界が広がったと考えられる。その理由を次に探ってみる。

3. 公園墓地の矛盾と限界性

(1) 問題点

多磨墓地以来、公園墓地として造成されてきたそれまでの墓地を振り返ると、井下が多大な情熱を傾けて多磨墓地計画に込めた意図が、その後の墓地計画では達成されていない面が見えてくる。

実際に墓園計画の担当者であった大阪府土木部公園課の技師の目は厳しい。

「戦災復興事業による墓地造成は、基本方針の適所に配置するという位置的な目標はほぼ達成しながら、デザインとしては公園墓地としての成果をあげたものは少なかったといえよう。なぜならば、市街地内の寺院墓地に対する換地という方策がとられたため、各寺院墓地の集合体に、公営の園路や修景地が附加されたという。かつての静岡市火災復興事業の墓地移転から、一步すすめることができなかったことにある²²⁾と指摘している。

また、昭和44年前後して造成された地方公共団体の墓地についても、「これらの現在までに完成したいわゆる「墓園」なるものが、必ずしも公園墓地という目的を達成していないことは残念である。その理由としてあげられることは、墓園の設計に当り、公園と墓地との並置をもって、その目的が達成せられたという誤解が最も多いことである。²³⁾と指摘している。

「墓園である以上、墓地と修景要素は、同一の敷地の上において、一体となるべきであって、従来と同じ形式の墓地に参詣したついでに、公園で遊んでいこうという考えは誤りである。今後の墓園の設計に当っては、この点を十分に注意して、故人の霊域として価値を高めたいものである。」と述べている。

つまり、第1はデザインの様式として、修景や残存樹林や地形の活用の点、墓石や関連設備、施設もすべて庭園の点景として、墓園を一つの庭園、公園とした理念が発達しなかったこと。

第2に、さらに墓地と公園の並置（旧来の墓地の形態を残しつつ、園路や広場などの公園要素をもちこめば公園墓地になるという考え方）でよいと捉えた点。

第3に、より本質的には井下自身が意図した中に矛盾あると考える。それは、「都市生活の中に、自然の麗し

写真 多磨霊園の園路の彫刻を配置した辻風景

さと霊妙な其力を享入れて庭園を作り、公園街路樹となっている如く、永遠の安棲地である墳墓の地も亦自然の麗しく朗らかな浄地でありたいのである²⁴⁾とすれば、墓地を移転した跡地を公共緑地や公園として利用したのであれば、なぜそのものを都市市民の眠る墓地公園と成せなかったのか、という疑問である。

そこで、井下が意図した公園墓地が達成されなかった点を述べた次に、ではなぜ公園墓地が当初の企図どおり達成されなかったのか。その理念を検証することで、井下の公園墓地の計画理念の矛盾と限界性を探ってみる。

(2) 井下清の公園墓地の再検討

多磨霊園の建設の理念となったのは、「新旧の習俗と内外基本理念の錯綜の上に立って」である。(1)形式としては、自然風景であり、(2)習俗として、家族制度と埋葬形式を基礎としていることである。しかし、この理念と方式が、破綻しているのが、現在の墓地問題の根本的問題であり、その理念の変化が解決への課題を示している。

現在の公園墓地の現状とその問題点を整理すると、表-A のようになる。項目は①様式、②立地、③面積、④規

表-A 現在の公園墓地の様式と問題点

	現在の公園墓地	問題点
公園 様式で あること	① 様式 公園 風景 庭園 森林 都市周辺郊外、遠隔地 ② 立地 ③ 面積 ④ 規模 ⑤ 環境への影響	① 広大な面積確保が困難 維持・管理経費増加 参詣交通不便、寂寥の地 ② 土地不足、景観破壊、 防災上危険 ③ 園内移動に不便、防犯上 危険 ④ 墓所面積を3/1にしても 住宅隣接地、地域内に計 画されることに地元の反 対が多い。
	⑥ 隣接地	
	⑦ 個々の家族 墓所 ⑧ 家族石 ⑨ 墓石 ⑩ 永遠の墳墓 (永代使用) ⑪ 墓所の使用 権、墓石の 所有権は承 継者で定め ている。	維持・管理に心労 無縁の場合、整理の実施 に工費と煩雑な手続き 無限の拡張の必要がある 無限に需要が増加 承継者がいない場合使用で きない
	⑫ 単位の墳墓 形式 ⑬ 単位の 使用 ⑭ 期限 ⑮ 継承	
	⑯ 単位の墳墓 形式 ⑰ 単位の 使用 ⑱ 期限 ⑲ 継承	
経済上	② 経費 単位の墳墓 園地全体	建墓と管理経費大 造成期と完成して全部使 用済みになって数十年後 から、経費増大

模、⑤環境への影響、⑥埋葬形式、⑦墳墓の単位、⑧使用期間、⑨継承、⑩経費である。

第1に①様式としての公園、風景、庭園、森林墓地は、広大な面積を必要とする。そのため用地は確保困難となり、②立地は、安価でまとまった土地を入手しやすい都心部から遠隔地にならざるを得ない。そのため参詣交通不便で、寂寥の地域になる。居住地から墓地が離れて遠隔地になれば、当然参詣は遠のく。

さらに、風景、公園様式の主体となる植え込みや樹林地は、造成当初はみすばらしいものであるが、年月を経れば植栽、樹林地は成長して立派になる。しかし、反面外観の修景としてはすばらしいが、広大な墓園の中では保安上、また維持・管理上でも不便がでてくる。

③広大な面積は、既存の樹林地や斜面に造成されれば、景観破壊や防災上の危険性もある。さらに、造成完成後利用が開始されてから以後は年月が経つほど親類・縁者が少なくなり、参詣者が減少しはじめる。公園の樹林地が成熟してくるのは反対に無縁者が増えて利用者が減りますます近づきにくい空間へと変化していくことになる。

第2に、「日本古来の習俗、家族制度を基本とする我が国風」を残したことによる。

その1つは⑥埋葬形式を火葬の普及にもかかわらず、土葬式と同じように土地の密着利用を基本としたこと。2つは⑦家族、「家」を単位とした家族墓所としたことである。設計、開園された大正7～12年の当時は、戦前の旧民法を根拠として、いわゆる家制度の中の家族として捉えられていたと考えられる。しかし、家長を中心とする家族は、都市化、産業化の中で移動性が高まり、核家族化を早急に進めた。そして、さらに後で述べたようにさらに家族の多様化、個人化を進めた。それにより、都市には、第1にこのような都市住民の細分化する膨大な量の家族の墓地が必要になったこと。

第2に家の継承者が不確定になったことで、無縁化がおこってきた。これらが旧来の家族制度を基礎に設計されたことによる、第2の理念の崩壊である。

第3に、習俗として、土葬による埋葬形式を基礎に墓所が設計されていた（火葬－焼骨であれば、土葬による形式でない墓所の様式が考えられることである）ことで、墓所に一定以上の面積を必要とし、需要の増大で膨大な墓地が土地としての都市近郊にもとめることが破綻したことである。

さらに、形式と家族制度と土葬を基本的な習俗とする三つの基本理念の破綻に伴って、公営墓地として、大きな責務としていた、提供の迅速性も支障をきたしたことである。「公共の責務として、個人的に処置しがたい葬務については、あらかじめ平素慎重な調査を重ね、適切な施設と運営の体系を整備して、必要に際しては迅速懇切に奉仕することに公共葬務施設の使用がある」としていた公共葬務施設をとしての理念も破綻していかざるを得なくなっているのである。

つまり、公園墓地が抱えている問題は、公園墓地の“公園性”にあるのではない。ハード面で、墳墓の形式単位、使用期間、継承権に現実の市民のソフト面である家族形態やライフスタイルの変化の動向とミスマッチがある。

この両者から、経費など経済的問題と環境への影響が派生していると考えられる。つまり、内－中味－シンボル（象徴）－精神とした家族が、近代化の中でその構造を変化させていったにもかかわらず、それを基礎として、外－形－様式－デザイン－技術としての公園（風景）墓地と重ね合わせたところに、都市化の中で破綻を進めていったと考えられる。

引用・参考文献

- 1) Normant Newton : Olmsted and Vaux : Design on the Land : 267-268
- 2) 4) 6) 井下清 (1942) : 建墓の研究 : 雄山閣 P 57-64
- 3) 大阪府土木部公園課 (1964) : 墓園－都市計画墓地 : P 3
- 5) 井下清 (1933) : 墓苑を語る : 庭園と風景 P 421
- 7) 井下清 (1957) : 都市の風景墓地とその再検討 : 都市問題 P 472
- 8)－15) 井下清 (1942) : 建墓の研究 : 雄山閣 P 57-64
- 16) 17) 井下清 (1937) : 庭園式墓地の再検討 : 公園緑地 P 450-51
- 18) 井下清 (1936) : 都市の墓地整理と将来の対策 : 第5回全国都市問題会議研究報告 P 440-11
- 19) 野間光辰 (1935) : 近世文学に現れた七墓参りについて : 上方56号大阪探墓号 : 創元社 P 26-27
- 20) 24) 井下清 (1942) : 建墓の研究 : 雄山閣 P 57
- 21) 22) 23) 大阪府土木部公園課 (1964) : 墓園 P 3-9
- 25) 井上安元 (1941) : 墓地経営 : 古今書院 P 471-20

Summary : Tama Cemetery was planned by Kiyoshi INOSHITA in 1919.

Intention of that cemetery was based on the family system in Japan and the natural & clean scenery in Europ & America. That have influenced public interest, and that styl became very popular in Japan. But that style needs very large space, so these position are very far from city. And the unit of grave space based on “IE” family system and based on the burying custom have needed enormous space. The problem is to mismatch of the park-like style and the family system.